

今週の為替相場見通し(2020年1月6日)

総括表		先々週と先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.84 ~ 109.68	108.18	106.50 ~ 108.50
ユーロ	(ドル)		1.1070 ~ 1.1240	1.1156	1.1050 ~ 1.1200
(1ユーロ=)	(円)		120.18 ~ 122.50	120.62	118.50 ~ 121.50
英ポンド	(ドル)		1.2905 ~ 1.3284	1.3075	1.2900 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	141.01 ~ 144.37	143.14	139.50 ~ 143.20
豪ドル	(ドル)		0.6893 ~ 0.7032	0.6946	0.6890 ~ 0.6990
(1豪ドル=)	(円)	*	74.86 ~ 76.55	76.45	73.30 ~ 75.30

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 106.50 ~ 108.50 円

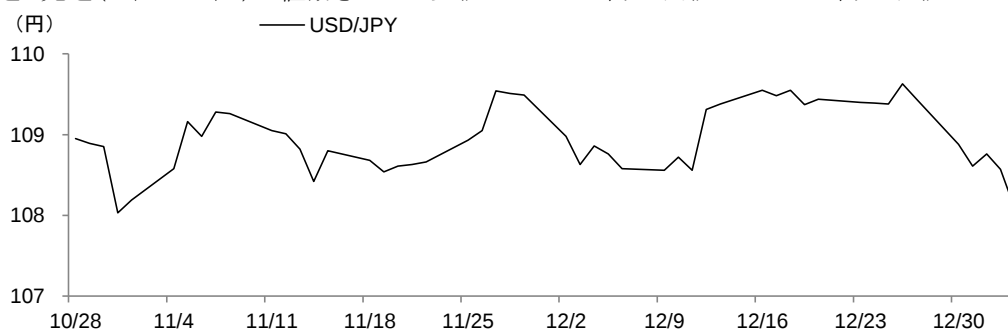
(2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

23日週のドル/円相場は動意薄の展開。クリスマス週で取引参加者が限られる中、23日に109円台半ばでオープンして以降、ドル/円は109円台前半から半ばでの膠着感の強い推移が続いた。26日にドル買いが強まる中で109.68円の高値を付ける場面も見られたが一層の高値追いつとはならず、27日も方向感乏しく、結局109円台半ばで越週する展開となった。30日週のドル/円相場は、中東情勢が緊迫化する中で年明けに下振れする展開。日本の年内最終決済日である30日は、日経平均が下落し、加えてドル全面安の地合いの中で海外時間に108.77円まで下落。31日にもドル売り優勢の中で108円台半ばでの上値の重い推移となった。明けて2日は株式市場が堅調な推移となる中で、108円台後半まで戻す局面も。しかし、米債利回りが低下する中で108円台前半まで下落した。3日はイラン革命軍の司令官が空爆により殺害されたとのヘッドラインを受けて、原油価格は急騰、株式市場も下落するなどリスク回避の動きが強まる展開となった。ドル円も一時11月1日以来の水準である107.84円まで値を落とした。終盤にかけては値ごろ感から買戻しが入り、結局108円台前半で越週している。

今週のドル/円相場は、上値の重い展開を予想する。年明けのドル/円の下落の主要因である米・イランの緊張について時系列を追って確認すると、3日にイラン革命防衛隊の司令官を空爆で殺害。それを受けてイランの最高指導者であるハメネイ師がツイッターで報復攻撃を示唆。その後、4日にはトランプ米大統領が“イランが米国人や米国の施設を攻撃した場合、イランの施設52カ所を「非常に激しく」攻撃する”とツイッターに投稿。予断を許さない状況が続いている。現状、米国側は“やられたらやり返す”というスタンスであり、今後はイランの動向を追っていく必要があると考えているが、イランでは司令官殺害を受けて数千人規模の反米デモが行われるなど反米感情の高まりが確認され、またイランの隣国イラクにおいて旧米軍管理区域にロケット弾が撃ち込まれるなど、情勢の緊迫化も確認できる。5日にはイラク議会が緊急招集され、今後の対応について協議が行われており、強硬姿勢・武力行使などが確認された場合はドル/円が更なる下値追いつとなる可能性もあろう。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(12/23~1/3)の値動き: 安値 107.84 円 高値 109.68 円 終値 108.18 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 高村 尚史

(1) 今週の予想レンジ: 1.1050 ~ 1.1200 118.50 ~ 121.50 円

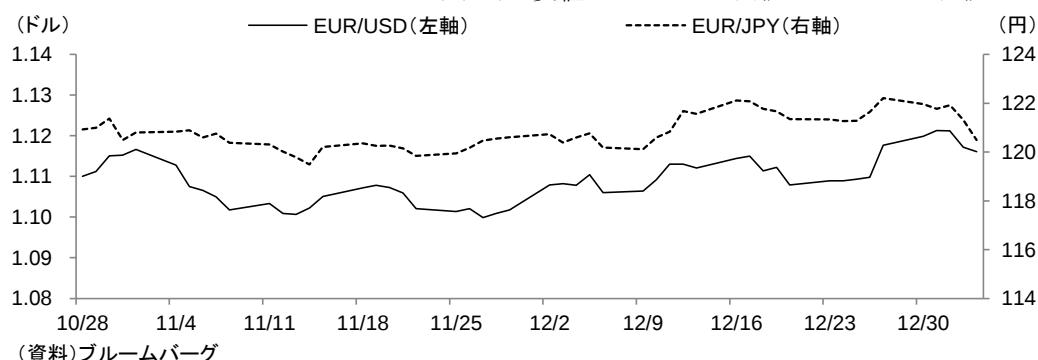
(2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

23日のユーロ/ドルは、1.1080近辺でスタート。英国がEUの離脱条件を移行期間中にまとめられないとの懸念が浮上したこともあり、24日には一時1.1070をつける場面もあったものの、クリスマス休暇週で動意なく推移。欧州休場明けの27日から年末にかけてはマーケット全般的にドル安が進行し、ユーロは底堅く推移。対円では30日に122.48円、31日には対ドルで1.1240と、当該期間中の高値を付けた。2020年に入ってからドル買い戻しの流れからユーロは反落。3日には米軍のイラン攻撃の報道を受け、ドル買い・円買いが進行。欧州株が軟調だったこともあり、対ドルでは一時1.11台前半まで、対円では期間中の安値となる120.18円まで下落した。しかし、その後は米12月ISM製造業景況指数が予想比落ち込んだことによるドル売りによってやや水準を戻し、対ドルで1.11台半ば、対円では120円台半ばで越週している。

今週のユーロ相場は上値の重い推移を予想する。12月のラガルド新総裁によるECB政策理事会は金融政策据え置きとなり、体制の変更もあって当面は金融政策面も動きが出づらそうである。Brexit情勢は移行期間中の離脱条件交渉について不安が残るものの、保守党が過半数を確保し、通商協定などでEUとの交渉が始まるまで短期的には大きな動きは見込みにくい。よって、ユーロ主導での相場展開というよりは、引き続きドルなど他通貨の動きに左右される展開が続くと見ておきたい。その点、昨年末にドルが下落し、年始は直近安値から反発する形となっている。今週は10日(金)に米雇用統計が予定されており、非農業部門の雇用者数が前月比15万人以上の安定的な増加という堅調な内容が予想されるほか、中東情勢への懸念からドルや円も強くなりやすいだろう。よってユーロについては上値が重いと見ておきたい。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(12/23~1/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.1070 高値 1.1240 終値 1.1156
(対円) 安値 120.18 高値 122.50 終値 120.62



3. 英ポンド

欧州資金部 永井 康

(1) 今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3200 139.50 ~ 143.20 円

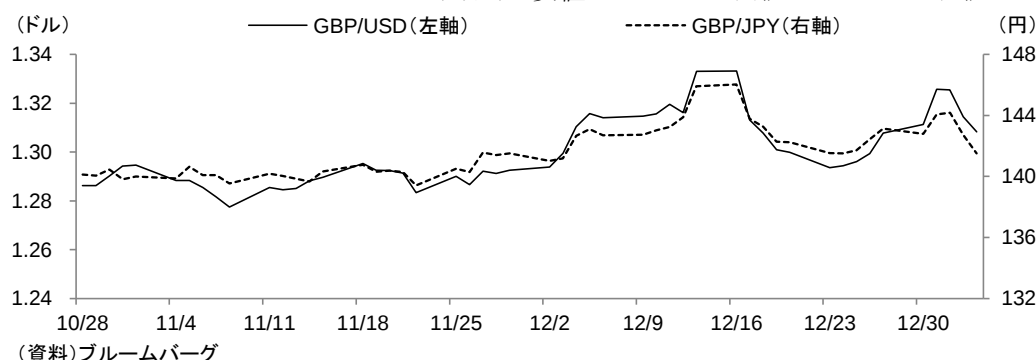
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、年末年始で参加者が少なく閑散とする中、上に往って来いの展開。31日、目立ったヘッドラインは見られなかったものの、年度末のドル売りフロー主導で、1.31台前半から1.3250台まで上昇。年明け2日は、一転年度初のドル買いが見られていた他、12月の英製造業PMIが47.5(前回48.9)と改善が見られなかったことも相俟って英ポンドは下落に転じ、年末の水準である1.31台前半まで戻す形に。昨年12月の英総選挙を終え、長らく英ポンド市場を支配してきた「不透明感」が払拭されたことを受け、英国の景況感に対しても一部には改善を期待する向きがあったものの、悪化する形となり英ポンドは下落で反応した。「不透明感」が晴れたとはいえ、これから始まるEUとの自由貿易(FTA)交渉が終結しなければ何の解決にもなっていないという実態経済回復への道のりの長さを示す形となった。ドル買い一巡後は英ポンドにも買戻しが見られたものの、その戻し幅は限定的となった。翌3日、米軍によるイラン革命防衛隊の司令官殺害が伝わると地政学リスクが意識され、クロス円売りとなり、英ポンドは1.30ミドルまで下落。その後リスクオフが加速することなく、株・金利が様子見となる中、1.30台後半で小動きとなった。

今週は、上値の重い展開を予想。先週金曜日(3日)の米軍によるイラン司令官殺害を受けて、イラン最高指導者ハメネイ氏は報復措置も辞さない旨の声明を出しているようにリスクオフに拍車がかかる可能性もある。そういった場合にはクロス円の売り主導でポンド安が進む展開も想定され得る。また7日(火)には米11月ISM非製造業指数、10日(金)には米12月雇用統計等、主要経済指標の発表も控える。先週金曜日のリスクオフ時にも米10年金利は1.80%でサポートされ、金利低下方向への感応度が限定的であることを考えるとこれら経済指標が強かった場合に、リスクオフの巻き戻しで金利上昇、ドル高という展開が想定しやすい。そういった場合にはドル主導でポンド安が進む展開も考えられる。一方でイランが強硬姿勢を示さない限り、このリスクオフは長続きしないと考えるのが妥当であり、英ポンドを始めとした主要通貨のボラティリティが2018年12月以来の低水準にあることを考えると一方向に英ポンド安が進んでいく展開は想定しづらく、テクニカルな観点から見ても1.29台前半まで売られる局面では押し目買いが入ることも考えられる。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(12/23~1/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.2905 高値 1.3284 終値 1.3075
(対円) 安値 141.01 高値 144.37 終値 143.14



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 0.6890 ~ 0.6990 73.30 ~ 75.30 円

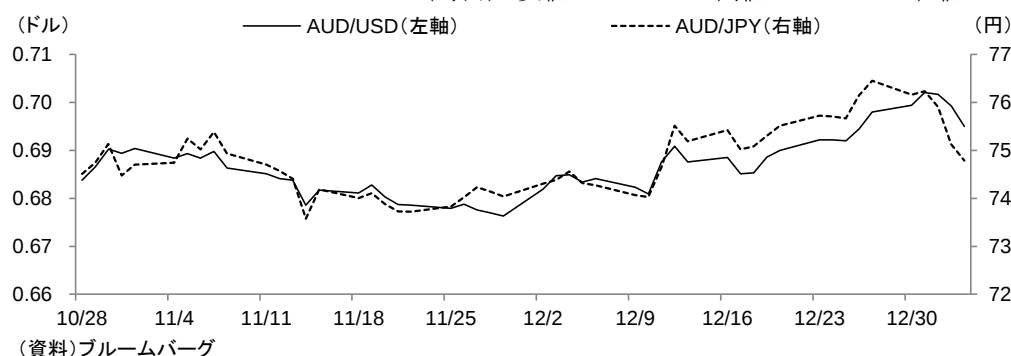
(2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

先々週からの豪ドルは、横ばいでの推移となった。23日はアジア時間早朝、中国が来年1月1日より米国製品の859項目に課せられている関税を引き下げるとのニュースで上昇してスタート。24日はクリスマス休暇を控え市場参加者が少ない中、レンジ内での推移に終始した。クリスマス明けの27日はリスク選好の動きから豪ドルは買いが優勢となったことで、0.6980台まで上昇した。30日は、0.7台をトライ。リスク資産に対する投資意欲改善の流れをうけて、豪ドルもじりじりと上昇し、一時は0.7台をタッチするも上抜けずに取引を終えた。31日は、大晦日で取引が閑散となる中、前日に引き続き買いが優勢となり0.701台まで上昇した。中国統計局が発表した12月製造業PMIが50を2か月連続で上回ったことも相場を下支えた。年明けの2日は、0.698台まで下落。アジアオセアニア時間は、東京市場が休日の中薄商いが継続。欧州時間に入り、米株式市場が上昇する中、米ドル買いの流れから豪ドルは下落に転じた。3日は、米国によるイラン精鋭部隊司令官の殺害をうけて、市場はリスクオフの展開。豪ドルも0.6945レベルでオープンしたのち0.69前半まで下落し越週した。

今週の豪ドル相場は、堅調推移を予想。重要指標や中央銀行当局者による講演等は予定されておらず、目新しい材料の不足する状況下、動意の出にくい展開が継続しそうだ。豪ドル相場は、先月にかけて上昇し、200日移動平均などの心理的節目を突破し、下値を固めている状況。一時0.7台も上抜ける勢いとなっている。豪経済は、利下げの効果も徐々に始まっており、住宅価格は底打ちを見せている。また雇用統計も悪化に歯止めがかかっている印象である。一方、豪州準備銀行(RBA)は、今年2月の会合において経済見通しの再評価を行うことを表明している。雇用とインフレ目標に近づくために、必要なら追加緩和の用意があると強調していることから、このまま豪ドルの上昇モメンタムが加速する可能性は少ないだろう。引き続き米中貿易交渉や英EU離脱を巡る交渉の行方に注視しつつ、しばらくの間、豪ドルは底堅い推移となろう。尚、年明け早々に米国によるイラン攻撃による地政学リスクが台頭。リスクセンチメントは悪化しつつある中、中東情勢如何によっては、豪ドルも弱含む可能性に留意したい。

(3) 先々週と先週までの相場の推移

先々週と先週(12/23~1/3)の値動き: (対ドル) 安値 0.6893 高値 0.7032 終値 0.6946
(対円) 安値 74.86 高値 76.55 終値 76.45



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。